



平成23年12月5日

卓話『我が国の青年運動について 震災後のJCとは』

公益社団法人日本青年会議所 直前会頭

相澤 弥一郎 様

私は杉並の百姓でございます。私で15代、江戸開府以来400年弱というところでしょうか。阿佐ヶ谷で地主業をしております。青年会議所に入って人生の3分の1ぐらい、この運動に費やしてきました。今、我々の団体は702箇所、北海道から八重山群島までおよそ4万人、かの麻生太郎先輩は2代目をたたき直す団体だとおっしゃっておられました。青少年の育成ですとか社会の不条理に対して何かのアクションができないか考え、訓練している団体でございます。私も役職を戴くにつれ厳しいものを見させていただいてますが、2代目、3代目ですとひどいもので、名刺交換の仕方ひとつ知らないんです。通常中小企業のオーナーで、次に自分が社長になるべく生まれてきた人たちは、生まれた瞬間から社長になることがほぼ決まっています、周囲もそう見るわけですね。そうなるというの間にか社会の中でピントがずれてしまう。偉い人ほど、垂れる稲穂のように下から来られる。そういう姿に受け手の私たちも感動する。そんなことを教わりながら片や社会のために働く、そんな団体でございます。

2010年度から私も好き勝手にJC活動をやりました。メンバーを指導する立場にはなりませんが、考えてみると自分自身が4万人の中で最も成長させられた1年でした。全国各地を歩いて回りますと、いろんな地域で地域の活性化のために一生懸命やっているんですね。そこに来て3月11日の東日本大震災、本当に国難でした。私たちは震災の翌日には青年会議所に復興本部を立ち上げ、現地と連絡を取りながら救援物資を送りました。多く

の支援をした自負がございます。多くの学びを得ながら、もう一度日本を創っていかうという気持ちでやっています。

青年会議所がなぜできたのか。60年前に同じような状況から立ち上がった人たちがいたわけです。60年前、当時の若い人たちは、みんな南方まで鉄砲を担いで行き、負けて帰ってくる。そして焼きつくされた風景を見た。そのなかで何とか身体が動く人、何かできる人が集まって皆のために動けるものはないかと作られたのがJCで、それが全国に広がったと私は理解しております。

私たちの世代、大学卒業が大体92年。バブルの崩壊は89年。それ以降に卒業した人は就職氷河期をいきなり迎えるわけです。そういう人たちにとってバブル経済は伝説です。世の中こんなもんだと思っている。景気のいい時代を知らないから、いいものを求めようもない。それで慾が無くなってしまいます。ですから今、先輩諸兄にお願いしたいのは、その慾を教えてあげることなんです。もっといいものもある。自分が頑張ればもっとちゃんとした生活になるんだと、そのありがたさを伝えるのが、壮年の世代の役割ではないかと思うわけです。日本はまだまだ立派な若い人たちがいるんだということをご理解いただいて、JC出身の若いメンバーをご指導いただけたら光栄です。

本日はありがとうございました。

